涼宮ハルヒの探検隊

今日の長門有希外伝　涼宮ハルヒの探検隊

【魔界都市出版】

デュ～
デュラハンだ！

涼宮ハルヒの探検隊

プロローグ…3
1……5
2……6
3……9
4……10
5……12
6……14
7……17
8……20
9……22
10……23
11……26
12……28
13……30
14……33
エピローグ…36

あとがき……37

※この作品は魔界都市日記内でほぼ毎日連載されている
ＳＳよりオゴポゴシリーズをまとめたものです。
そのため「明日」のような表現があります。
また、キョンと長門は交際している前提となっております。

プロローグ

「やっぱり、不思議な物ってなかなか無いわね」
ある週末の不思議探索の終わり際、ハルヒが珍しく弱気な口調でそう言った。
今回の組み合わせは俺と長門とハルヒ。長門はそんなハルヒをチラリと見たが、特に返答はしない。
今まで何度パトロールをやったかは覚えてないが、けっこうな回数のはずだ。長門なら正確な回数を答える事が出来るだろうが、別に知る必要はないからどうでもいい。
「そうだな」
一応、相槌を打っておく。機嫌を悪くして妙な提案をされても困るからな。
「毎週、似たようなところばかり回ってるから、なかなか見つかるもんじゃないだろ」
「そうよね」
ハルヒは口をとがらせて何やら考えるような表情。見つかりそうにないって事で頻度を減らしてくれると助かるぞ。主に俺の財布がな。
「ま、考えておくわ」
ハルヒがそう言ったところで集合時間となり、俺達はいつものところに集まってから解散した。
去り際、どことなく悩んでいるハルヒの様子がちょっとだけ気になった。まあ、財布にダメージを受けると言っても、実質的には長門とのデートになっている日もあるし、全面廃止までは思い詰めないで欲しいところだ。隔週くらいにしてくれれば俺は一番都合がいいぞ、うん。
週が明けて月曜日。果たして涼宮ハルヒの様子がどうなったかと言うと――週末に別れた時とあまり変わっていなかった。
机に頬杖をついて窓の外をにらみ付けている。土曜に別れてから日曜もあのまま悩んでいたのか？そう思うとちょっとだけ心配にならない事もない。
「大丈夫か？」
「別に」
ハルヒにしては珍しく生気の無い声だ。憂鬱真っ盛りだな。
「不思議探索の事で悩んでるんだろ？　あんまり気にするな」
「でも、成果が出てないのは事実じゃない」
正直、このようなハルヒの様子はあまり見たいもんじゃないな。授業中に背後で鬱オーラを発散されても気分がよろしくない。
「別に意味がないとは思ってないぞ。ただ、探す場所が悪いのかも知れないな。似たような場所に行ってもなかなか見つからないだろ」
長門と歩く時も似たような場所ばかりになってしまうからな。ハルヒは妙な事を発見する事においては頂点に立つ女だ。俺達が知らなかった施設を見付けてくれたりする。
それに、こんな状態のハルヒに背後で陰鬱としていられるのは何故か虫が好かん。
「そうね」
ふうと息を吐く。何となくだが、改善したように見えなくもない。
「せっかくのあんたの提案、無駄にしないわよ。早速、不思議がありそうなところを調べてみるわ」
すくっと立ち上がり、
「ちょっと行ってくる」
声をかける間もなく、ハルヒは教室を飛び出して行った。一体、どこに何をしに行ったのだろうか。ちょっとだけ、藪を突いて蛇を出してしまったような、そんな気分になった。
それから数分後、戻ってきたハルヒの手にはこの周辺の地図があった。
「借りてきたわ」
どこから借りてきたかはあまり聞きたくない。もし無断で借りてきたのだとしたら、俺が教唆して間接的に奪ってきた事になりかねない。
「職員室から。大丈夫よ、一応借りるって言ってきたから」
言った後、許可を得たかどうかは……まあ、考えない事にしよう。
ともかく、その日のハルヒは授業中も教科書そっちのけで地図を見ていたようだった。折り畳んで小さくして見ていたのだけは褒めてやろう、堂々と机の上に拡げて完全に授業を無視してやりかねないと思ったからな。

「涼宮さん、何をやっているの？」
休み時間になってハルヒの行為に疑問を持ったらしい朝倉が声をかけてきた。確かに授業中に地図を見ているのは奇妙である。
「あ、涼子」
ちなみにこの二人は普段からそれなりに仲が良い。朝倉が帰ってきた時に何やら話し合って、ハルヒが朝倉を気に入ったらしい。
「何か不思議なものがありそうな場所を探しているのよ」
「ふうん」
朝倉は唇に人差し指をあて、
「不思議なもの、ねえ」
何やら考えているようだ。頼むからお前は妙な提案をしないでくれよ。
「あ、そうだ。せっかくだから涼子に聞いておこうかしら」
何やら二人で話し込む様子になったので、俺は席を外す事にする。ついでだから、便所にでも行って来るか。
教室を出る間際、チラリと確認するとハルヒは朝倉と顔を付き合わせて何やら熱心に話していた。朝に比べてかなり機嫌は良くなっているみたいだな。
なんとなくほっとした。古泉じゃないが、あいつが不機嫌にしているのはどうも気に入らない。実際、妙な青い奴を暴れさせられても困るが。

さて、便所から戻って来て、俺は席を外すべきじゃなかったと後悔する事になった。
「キョン、連休になったらＳＯＳ団でオゴポゴ探しに行くわよ」
なんだその、オゴポゴってのは。朝倉、一体お前はこいつに何を吹き込みやがったんだ。
「カナダの事」
と言ってニコリと笑う。
「そうよ、カナダよ。カナダのオカナガン湖にオゴポゴがいるらしいのよ。目撃証言も多くて写真もあるらしいじゃない」
ハルヒの様子から考えると、そのオゴポゴってのはネッシーのような未確認生命体か何かだろうか。
「うん、これは燃えてきたわ」
完全にハルヒは本来のパワーを取り戻したようだ。正直、見ている分にはこっちの方がいいが、振り回される方としてはたまったもんじゃない。
「早速、今日の放課後は図書館で資料をあたってみるわ。もちろん、あんたも付き合うのよ」
めらめらと、まるで炎でも背負っているみたいなハルヒは、拳を振り上げてそう宣言した。
「頑張ってね」
そう言って朝倉は、俺とハルヒにニコリと微笑みかけてから自分の席に戻っていく。
こいつは俺とハルヒのどちらにも頑張ってと言ったのだろう。ハルヒに対しては文字通りだが、俺に対しては――
やれやれ。
ため息が出る。どうにかハルヒにカナダ行きを諦めるように説得を頑張らなければならない。本当に余計な事を言ってくれたな、朝倉よ。

涼宮ハルヒの探検隊　カナダを行く

1

さて、そのようなわけで俺達はカナダはブリティッシュ・コロンビア州トンプソン・オカナガンにあるオカナガン湖にやって参りました。目的はオゴポゴを捕獲する為です。

「出来れば生け捕りにしたいわね。最低でも生け捕り、最高でも生け捕りよ」

無理を言うな。写真だってそれほど撮られているわけじゃないんだろ？

ハルヒの説得を頑張れと朝倉に言われた俺だったが、結局、頑張れなかったわけだ。さようならジャパン。こんにちはカナダ。

カナダからの手紙という歌があったような気がする。懐メロ番組で名前くらいは聞いた事があるが、どんな歌かはよく知らない。たぶんカナダから手紙を送るんだろう。

手紙を送るとすれば長門にだろうか。しかし今現在、長門も来ているから手紙を送る必要はない。まあ、今の気持ちを送っておいて帰ってから見るというのもオツなものだが、

「正体を暴くまで帰らないわよ！」

と言うとハルヒは、湖の周りをうろうろしながら水中をのぞき込んでいる。

しかし、今まで何人がオゴポゴの正体を調べてきたと思っているんだ？　図書室で調べた資料だと一八七二年に最初の目撃例があるって言うじゃないか。もう百年以上前だぜ。一生帰らない覚悟をしろって事か？

しかも、最新機器を導入した探検隊が調べても見つからなかった。そんな設備のない俺達で、どうしろって言うんだよ。

「その点ならご心配なく」

古泉がいつものようにニヤけた笑みを浮かべる。

「我が機関の資金力を甘く見ないでください。手配に手間取ってますが、明日には到着するかと」

そう言えば今回の飛行機もこいつの親玉が何とかしてくれたんだったな。たまたま自家用機でカナダに向かう知り合いがいるが、五人分の空きがあるとか。帰りも人数分がたまたま空く予定なのか？

「ええまあ」

そこで古泉は少しだけニヤけ度減の笑みで、

「でもいつになるでしょうね」

確かに帰る見通しはいつまでも立たないな。見付けられるとは思えないが……なあ、どうなんだ？

「涼宮さんが真剣に発見したいと願えば、或いは」

どうやら実在するところまでは確定事項らしい。困ったもんだね、ハルヒの能力も。

で、もし発見したらどうするんだ？　そんなのが当たり前の世界になっちまったら困るんだろ？

「ええ。ですが、オゴポゴは未確認生物の中でも存在する可能性が高いと言われています。科学的根拠さえ説明できれば、世界中の未確認生物が発見されるような事態にはならないでしょう。まあ、オゴポゴと同程度の可能性がある未確認生物が各地で発見される可能性は否定できませんが」

そりゃ安心……していいのか？

「まあ、少なくとも今日は発見する事はないでしょう。さすがに涼宮さんも設備が無いのに捕まえられるとは思っていないと思いますから」

そうだといいんだが……

「キョン、あんた素潜りで探して来なさいよ！」

遠くからハルヒが叫ぶ。

だが断る。生身で見付けられるはずがないだろ。

「涼宮さんはあなたに対して非常に期待しているようですね。もしかすると……」

以前にもそんな事を言ってなかったか？　やめてくれ、いい迷惑だ。

「あの、キョンくん」

朝比奈さんがすっと両手の平を上にしてこちらに差し出す。何ですか、それは？

「服を脱ぐなら預かります」

泳がせる気ですか、あなたも。

「大丈夫」

長門がチラリと俺の顔を見る。ああ、長門が頼もしい。ハルヒを説得してくれるのか？

「呼吸なら任せて」

そっちかよ。

それから俺は、ハルヒに言われるままに素潜りで探すことになった。綺麗で雄大な湖だが、泳ぎたいものではないな。寒いし。

「お疲れさま。ま、今日はこんなもんかしら」

ハルヒは見付けられなかったのがさほど残念ではない様子だ。期待していなかったのなら、最初から泳がせないでくれよ。

「どうぞ」

朝比奈さんからタオルと着替えを受け取る。

って……どうしてバスタオルをこんなところまで持ってきたのですか？　まさか、こうなることを知っていたのでは……

「禁則事項です」

まあ、そう言うとは思っていましたよ。

「……」

着替え終わったところで、トコトコと長門が近寄ってきて、背中にぽんと手を置いた。

水が引くような、体の表面が乾いていく感覚。暖かいのは気のせいか？　まあ、何にせよありがとよ。

「あなたの体に付着した水分を原子レベルで分解して酸素と水素に化学変化させた」

体の表面でやっていい事なのか、それ？

しかし……いつになったら帰れるんだろうね。

「大丈夫」

長門が俺の顔を見る。何となく笑ったような気がする。

「夢オチだから」

2

カナダ二日目。

長門によって結局は夢オチであると宣告されたわけではあるが、それにも関わらず俺達はオゴポゴを探索しなきゃならないらしい。

昨夜は男女別に二部屋に別れて寝る事になった。夜ばい？　そんな命知らずな真似を出来るはずがない。仮にこれが夢だったとしても半殺しにされるのは間違いないからな。それに、男ってのは三日分まで貯蔵する事が出来るって話だ。ならばそれからでも遅くはない、違うか？

そんなわけで、俺は古泉と一緒の部屋で寝た。泳いで疲れたせいですぐに寝た。古泉が何やらトランプを持ち出してきたが、無視して寝た。

さて、古泉の言ったようにオゴポゴを探すための設備とやらが到着した。

「うん、なかなかいいじゃない」

これは、なかなか、で片付けられるもんなのか？

五人で乗れる大きめのモーターボート一隻。しかもこれには魚群探知機まで搭載されている。あとは水中探索用の潜水カメラ。おかげでボートの上にはモニターがいっぱいある。ハルヒはドカドカとボートに上がり込み、何やら物色を始めている。やる気満々だな。

それだけではない。ベースキャンプ用にパイプを組み立てるタイプのテントが一つ。これは学校の運動会などで使われているのと似たようなものだな。一応、寒ければ周囲を囲えるようにもなっている。

で、これはどういう理由で借りられた事になっているんだ？

「実は、僕の親戚にはオゴポゴ捜索をしていた人がいるのですが、彼は実は少し前に引退したばかりなんです。で、余ったものをそっくり」

そうか。そんな因果な事をやっているわりには金持ちだな、そいつ。

「大学から補助金を得て研究をしていたんですよ」

その設定はハルヒには言わない方がいいと思うぜ。すぐにでもそいつの元にオゴポゴの情報を根ほり葉ほり聞きに行きかねない。

「その点ならご心配なく。昨日、あなたが寝ているうちに呼びつけて話を聞いた後ですから。もちろん、演技指導は怠っていません」

そこまでやるとはな……一体、お前達は今回の事でどれだけの金を使ったんだ？

「それは」

古泉は、すっと指を唇に添える。

「禁則事項です」

と、ウィンク。やめろ、目が腐る。

「キョン、なにボサボサしてんの！　早くこっち来て準備を手伝いなさいよ！　探す気あんの!?」

無い。

しかし、そう言えないのが辛いところだ。俺はハ

ルヒに言われるがままボートに上がり、機材のチェックなんぞをやらされている。
「はい」
と、何やら英語の小冊子を渡された。これは何だっていうんだ？
「使い方」
読めってか。いくらなんでも、無理があるぞ……
「大丈夫よ。何も全部読んで覚えろって言ってるわけじゃないわ、写真を見て大事そうなところだけ訳すればいいのよ」
そうは言うが、辞書も無しに読めって言うのか？
「キョンくん、安心してください」
と、朝比奈さんが取り出したのは英和辞典。
一応聞いておきます。どうしてこんなところまでそんなものを持ってきたんですか？
「禁則事項です」
でしょうね。
しばらく俺は、英語だらけのマニュアルと奮闘する事になった。ハルヒは他のメンバーとテントを組み立てている。全く、なんで俺だけこんな事をやらされてるんだ？
がさがさと草を踏むような音。
「……」
気が付くと、隣に長門が立っていた。テントも大体出来てきたところで、こっそり抜けてきたらしい。
「どうした？」
「すぐ食べて」
急いでいるのか、長門が口の中に何やらぐにゃぐにゃした物体を放り込んできた。噛むとブツブツ切れるが、味が無くて湿っぽい。
一体、なんだこれは？
「食べると外国語を理解する事が出来るようになるこんにゃく」
そうか、名前は言わなくて良いからな。
「ほんやくこんにゃく」
言うなよ。
名前はともかく、確かに俺はそのマニュアルが読めるようになっていた。これなら問題ない。
まあ、読むのが面倒な事には変わらないのだが、エベレストに登れと言われていたのが、地元の山に登れと下方修正されたくらいの違いだ。
しかし、そんな便利なものがあるなら最初から欲しかったところだが……
「あなたが辞書を読んで翻訳する姿勢を見せる必要がある」
なるほど。確かに最初からスラスラ読めたら怪しまれる。良い判断だぞ、長門。
ぽんと頭に手を置くと、長門はくすぐったそうに首をすくめる。
「それに」
ん、なんだ？　言ってみろ。
「あなたが努力している顔はわたしも好きだから」
くっ、なんて事を言ってくれるんだ長門！　飛行機で移動したのと、昨晩とで二日分も弾が貯蔵されている。駄目だ。最低でもキスしたい！
衝動的に長門の手を取った。
「いいか？」
すると長門はゆっくり口を開く。
「いい」
「――わけ無いでしょうが！」
何か衝撃があったな、と思ったら視界が暗転した。よくわからないがハルヒの怒鳴り声が聞こえたような気がする。恐らくそうなのだろう。
何故分からないかというと、俺はそれで気を失ってしまったからだ。

3

体がぐらぐらと揺れる。
ぺたり、と少し冷たい何かが額に触れた。この感覚は――
「ん――」
目を開けると、長門の顔があった。
「起きた？」
ああ、大丈夫だ。ようやくあの訳のわからん夢から解放されたか。
俺は額に当たっている長門の手に、そっと手を重ね――ん？
なんだか、手と顔の間に、何やら冷たい物が挟まっているぞ。なあ長門、これは一体なんなんだ？
タオルにしてはちょっと――
「こんにゃく」
……そうか。
どうやらまだ解放されていなかったらしい。
「あ、キョンやっと起きたの？　あんたしか機械の操作法わからないんだから、やってくれないと困るのよ」
ドカドカと足音を立ててハルヒが近付いてくる。それにあわせてグラグラと――って、ここはもしや。
起きあがってみると、視界に広がるのは一面の水。ああ、やっぱりボートの上か。
「ほら、電源入れてみたはいいけど、さっぱりわかんないのよ」
ハルヒにぐいっと頭を回された先には、電源が入ってはいるようだが、何を映しているのかよくわからないモニターがあった。
「確か、魚群探知機で調べてから潜水カメラで探すって言ってたわよね、あのおじいさん」
「ええ、そうです」
「キョン、だからあんたが魚群探知機を動かしてくれないと駄目なのよ。さ、この大役を任せてあげるから光栄に思いなさいよね」
ハルヒは仁王立ちで俺を見下ろしている。
まあ……やらなきゃならないんだろうな、ハルヒがそう言うからには。
モニターの横に置いてあったマニュアルを取り、パラパラと目次を……ん？
ああ、英語だ。紛れもなく英語だ。さっきは読めるようになったはずなのに……
「食べて」
スッと寄ってきた長門が、俺の口に何かを放り込んだ。しっとりして、ぬるっとして、生暖かい。これは――
「こんにゃく」
そうか。
「頭を冷やしていたこんにゃく」
だろうな。あんまり食わせて欲しいものじゃないな、それ。
「眠ったり気を失ったりすると効力が切れる」
こんにゃくを食ってから改めてマニュアルに目を落とすと、やはり内容がわかるようになっていた。楽ではあるが、やっぱりこの役目がめんどくさい事には変わりない。
「頑張って下さい。涼宮さんが期待していると明言するからには、このオゴポゴ探索の成功はあなたにかかっていると言っても過言ではないでしょう」
顔を近付けてくるな古泉。それに俺はこの件には乗り気じゃないんだ。
「では、あなたはこのまま一生カナダで過ごすおつもりですか？」
わかった、やってやるよ。仕方ないな……
マニュアルを開き、俺は目次から操作法を探す。しかし、英語で書いてあるのに意味がわかるのは便利なもんだ。
「テストなどで使用するのは推奨しない」
いや、俺はそこまで落ちちゃいないぜ。なんだ、泣きついたら使わせてくれるのか？
「それはちょっと見てみたい」
いや、やらないぞ、俺は。どっかの眼鏡少年とは違うんだ。でも……仮に泣きついたらどうする？
「堪能する」
そうか。
それはさておき、マニュアルをしばらく読んで、取り敢えず基本的な使い方を把握した。まあ、まず動かすことが出来れば、細かい操作法は後から覚えるだろう。

そのようなわけで、俺達は広い湖の上でオゴポゴを探す事になった。長く険しく、そしてめんどくさい探索だ。

その詳細は、またいつか別の時に……

「恐らく明日」

そうか。

4

ぷかぷかと揺られながら、俺は一向に変化のないモニターを凝視している。今まで色々な奴が調べてきた未確認生物なんて、そう簡単に見つかるはずなどないのだ。

世界は自分を中心に回っている。本気でそう思っていそうなハルヒだが、さすがにいきなり見付けられるとまでは思っていないようだ。

実のところ、魚群探知機はうまく設定さえしてしまえば操作する必要はあまりない。やる事がほとんどなくて楽ではあるのだが、変化のない画面を見続ける事は苦痛である。俺は一体、どうしてこんな刑罰を受けているんだ？

「ほらキョン、早く見付けなさいよ」

椅子に座ってふんぞり返ってるハルヒが檄を飛ばしてくる。しかし、俺に言われてもどうしようもない。魚群探知機の探知できる範囲にオゴポゴとやらがいてくれないとどうしようもないのだ。見付けるのは、俺よりもボートの運転をしている古泉じゃないのか？

「どうぞ」

こんな時でもお茶汲み担当の朝比奈さんがミルクティーの入ったカップを差し出してくる。魔法瓶に入っていたもので、それは冷えていた体を温めてくれる。ああ、生き返るね。

長門はというと、いつものように分厚いハードカバーの小説を読んでいた。

しかし、こうしていると、部室でやっている事と本質的にはほとんど変わらず、まるでカナダに来ているのが嘘のようだ。

ところで長門、気が付いたらお前は本を読んでいるが、それは一体どこから出したんだ？

「ポケットから」

そうか。

「腹部の」

いわんでいい。

「そろそろ食事にするわよ」

まだ飯には早い時間だが、ハルヒの奴は早くも飽きてしまったらしい。こんなんじゃ先が思いやられるね、まったく。

運転していた古泉もモーターを止めてこちら来る。ハルヒは船の片隅に置かれていたバスケットを持ってきて俺達の真ん中で開いた。

「今日はあたし達三人で作ったのよ」

三箇所から一つずつ取ると、プラスチックの皿に載せてそれを俺の前に差し出した。

「こっちから順番に、A・B・Cよ。このメモ用紙に誰が作ったのか推理して書きなさい」

ご丁寧に、ハルヒは一枚のメモ用紙とペンを俺に差し出してきた。準備がいいこった。こいつ、最初からクイズを俺に仕掛けるつもりだったのか。

「キョン、誰がどのサンドイッチを作ったか当てら

れるかしら？　特典は……そうね」
　ハルヒはニヤっと笑って、
「あの部屋に一泊、でどう？」
　なんだその部屋ってのは？
「あ、そっか。キョンはあの時もう寝てたんだっけ」
　ハルヒはポンと手を打つ。
「キョンが寝た後、豪華な寝室を一個追加で使える事になったのよ。昨夜は団長のあたしが責任を持って試してみたけど、うん、ベッドも柔らかいし最高だったわ。本当はその日一番貢献した人に使わせようと思ってたんだけど、これを正解したら今日は特別にキョンに使わせてあげるわ」
　もし、その部屋が使えたら……
　チラリと長門を見ると、長門は何やら口をパクパクと動かしている。
『がんばって』
　そう言われているような気がした。
　よし、俺は頑張るぞ。俺がその部屋に一泊する事が出来れば、長門がこっそり抜け出してきて夜ばいに来る。そうすれば……そう、この溜まりに溜まった情熱を長門にぶつける事が可能なのだ。
　こうなると、気合いを入れて選択せねばならない。サンドイッチ三種類。そして、それを作ったのが誰なのか。
　見た目は……それほど変わらないな。どことなくBはパンの大きさが上下で違う。少なくともこれは長門ではない。ハルヒか朝比奈さん……普段の言動を考えると朝比奈さんっぽくはあるが、料理にかけてはきっちりしていたような気がする。難しいな。
「見てないで早く食べなさいよね。あんたが答えてくれないとあたし達も食べられないんだから」
　とりあえず、俺はAを口に入れて味を確認。中に入っているのはレタスとハムとトマト。詰め込まれているわりにバラバラという印象はあまりない。調和が取れている。
　Bは……チーズが入った白身魚のフライに、オーロラソース。こんな凝った事をやるくせに、パンの切り方とかそういう細かいところが雑ってのは、いかにもらしいな。
　Cの具は卵か。ゆで卵を潰してマヨネーズと混ぜたものだ。ほんのりとマスタードの味。いかにもサンドイッチといった感じのサンドイッチだな。いや、味が悪いわけではない。
　AとCの判断に迷うところだが……Aを手にしてチラリと長門を見る。
「……」
　長門が無言でほんのわずかだけ首を傾けたように見えた。そうか、こっちじゃないって事だな。
　ちょっと卑怯かも知れないが、それくらいその豪華な寝室とやらの権利が欲しいのだ。俺は答えをメモ用紙に書く。
「終わったぞ」
「ふうん、自信満々じゃない。それじゃあ、あたしと一緒にAから順番に読み上げるのよ」
　ハルヒはすうっと息を吸った。
「Aは――」
「朝比奈さん」
「みくるちゃん」
　言ってる言葉は違うが、俺とハルヒの声が同時に同じ人物の名前を出した。
「なかなかやるじゃない」
　ハルヒは少々感心したようだ。
「次よ。Bは――」
「ハルヒだ」
「あたし」
　これも正解。楽勝だな。
「そっか……やっぱりわかっちゃうのね」
　そうだな。こんな凝った事をやるくせにパンの切り方が雑になるのはお前くらいだろ。
「ま、もういいけど最後までやるわよ。Cは――」
「長門」
「古泉くん」
　……なんだって？
「キョン、有希は料理しないのよ。あんた知らなかったの？」
　いや、俺の知ってる長門は料理するんだけどな。
「あたしのサンドイッチを当てたところまではすごいと思ったけど……あんた、やっぱりちょっと抜けてるわね」
　いや、お前達三人と聞いて古泉を思い浮かべる奴はいないと思うぞ、普通は。

結局、二人まで当てたものの、無情にも俺は一日宿泊権を手に入れる事は出来なかった。長門との甘い夜の為、俺は貢献ポイントをためてそれの獲得を目指すのであった！　俺の戦いは終わらない！

ええと、いかにも打ち切りみたいな煽りだが、続くのか？

「続く」

そうか。

5

昼食が終わり、再びオゴポゴ探索。やっている事は飯の前と変わらない。古泉がボートの運転、俺がモニターの監視、長門が読書、朝比奈さんが雑用、ハルヒが……見てるだけ。

「さ、食べる物食べたんだから頑張るのよ！」

普段なら投げ出したくなるところだが、この探索で貢献をすれば豪華な寝室の一日宿泊権が与えられるのだ。そうすれば、長門と甘くて熱くて愛しくて切なくて心強い夜を過ごす事が出来る。

だから、俺は先程よりも気合いを入れてモニターをのぞき込んでいた。ほんの小さな異変も見逃さぬように。

しかし……先程から全く変化がないな。水底の地形にあわせて下の方が変化してはいるが、その上には何も現れない。

「キョン、早く見付けなさいよね」

俺に言われても困るんだが……

「さぼってんじゃないでしょうね……今日中に何か怪しいものを見付けなかったら減点よ！」

とはいえ、オゴポゴが出て来てくれないと見付けるのは不可能だ。それに、古泉がオゴポゴのいる場所に船を動かしてくれないとどうしようもない。俺はただこのモニターを見つめたまま祈るしかない。

調べた資料に寄ると、体長は五から十五メートル。地元では大昔からナイタカと呼ばれて語り継がれてきた存在であり、ここに住む鮫が突然変異で巨大化したものか、水棲恐竜の生き残り、未発見の鯨類であるとの説もある。

ともかく、そのサイズは大きい。だから俺はある程度の大きさ以上のものしかセンサーにかからないようにしているのだが、この方法では駄目なのだろうか。

「なあ長門、どうすりゃいいと思う？」

「……」

近くに座っていた長門が、本から目を上げて俺の顔を眺める。

「このまま当てずっぽうに探しても仕方ないと思うんだが……俺のやり方はどうなんだ？」

「運任せ」

そうか。確かにそうだよな。魚群探知機の範囲にいてくれないとどうしようもないわけだし、きついようだが長門の言うとおりだ。

「餌場になりそうな場所を探せば良い」

そこで、俺はこれが魚群探知機である事を改めて思いだした。オゴポゴだって生物だから、定期的に食事をする。魚の群を探して、そこで待てばいいのではないだろうか。

俺はマニュアルを確認しながら、魚群探知機の設定を変える。巨大なものだけでなく、魚が群れている場所を見付けられるように……もっとも、それが本来のこの機械の使い方なのだが。

「ありがとよ、長門」

長門の頭にポンと手を置くと、長門は嬉しそうに首をすくめる。
「頑張って貯めて」
そう。俺達の目標は同じなのだ。俺達の目標は五十万ポイントを貯めて豪華な寝室とやらでの一日宿泊権。そこで一泊……いや、寝ないから正確には一泊とは言えないんだけどな。
ついでに、夜に頑張れるようにソッチの方もためておけって事だな。
「違う」
そうか。
ともかく、俺と長門が協力すれば、その権利を獲得する事は不可能ではないはずだ。
設定を変えると、小さい点がぽつぽつと映るようになった。しかし、これではゴミか魚なのか判別できない。俺が見付けたいのは、魚の群――ん？
「古泉、ちょっとスピードを落とせ」
「わかりました」
古泉が何やら操作し、船は微妙に減速。
「キョン、見付けたの!?」
ハルヒが満面の笑みでこちらに向かってくる。
「いや、まだだ」
ハルヒは明らかに不機嫌そうに口をとがらせる。
「だがな……これを見てみろ、魚の群がいるだろ。ここで待っていれば、動き回って探すよりもオゴポゴが現れる可能性はあると思うんだよ。それに、もしかしたらオゴポゴはボートの音を聞いて逃げているかも知れないからな」
「へえ、あんたにしては考えたじゃない」
珍しくハルヒに褒められたような気がする。
「今日はここに止まって探索！　キョンの作戦でやってみるわよ！」

ハルヒの了承を得て、俺の作戦が決行される事になった。果たしてこれが吉と出るか凶と出るか、具体的には長門と甘い一夜を過ごすことが出来るかどうか、それはまた別の時に語ろう。
「でもその夜の具体的な内容は大人の事情で語る事が出来ない」
そうか。

6

ボートを停泊させ、俺は息を呑んでモニターをじっと見つめる。モニターの中には魚の群が映っており、それに近付いてくるものが現れないか、ただひたすら待つ。
片時も目を離さず、モニターを集中して見つめる俺。ボートの上には緊迫した空気が張りつめて――いなかった。
「キョン、まだ来ないの？」
呑気にトランプでババ抜きなんぞをしながらハルヒが声をかけてくる。船を停めてしまえば運転していた古泉を含めて他の奴らは基本的に暇になる。いや、船が動いていても停まっていてもほとんど大差がないって気がしないでもないが。
しかし、なんで俺だけこんな扱いなんだろうね。ここでオゴポゴが現れてくれれば俺の手柄になって五十万ペリカの一日宿泊権を得る事が出来ると思われるのだが、それにしても暇である。かといってトランプに混じってしまえばオゴポゴが現れても見逃してしまうわけで、俺はただこうしてずっとモニターの前で待つしかない。
「なあ、交代制とかにしないか？」
いくらなんでも暇である。そもそも作戦の立案者が俺だから他の奴が発見してもポイントは俺にも入ってくるだろうという計算である。
「駄目よ、その機械はキョン担当でしょ。あんたに

は期待してるのよ」
期待している、と言われるとつい受け入れてしまうのが俺の悲しいサガである。なんとなく騙されている気がするな。
「騙されている」
そうか。

「今日のところはここらで終了ね」
日が傾き初めて来たところでハルヒがそう宣言。どうやらトランプにも飽きてしまったらしい。
目を皿のようにして見ていたが、それらしき影は全く現れなかった。ここの他に餌場があったって事だろうか。
「本当に魚だったんでしょうね、それ？」
そう言われてしまうと自信が無くなってしまう。もし今の作戦で探索を続けるなら、今度からは水中カメラを使って確認しなければならないな。
「ま、キョンもそれなりに頑張ったから十万ポイントあげとくわ」
一日宿泊権にはまだ遠いが、これで近付いたのは事実である。
ちなみに本来はその日の貢献度が一番高い人、との事だったがいつの間にかポイント制度に変更されていた。いつの間にそう変更されたのかは俺にもよくわからないが、ハルヒが言うのだから仕方ない。まあ、実質的には大差ないようだが。
ボートを水辺に戻し、機械が濡れないようにシートなどを被せる。テントはそのまま設置しておいても良いらしい。
「ここの土地は僕の親戚の」
以下略。
ともかく、古泉が色々やってくれるおかげで俺達は快適に探索することが出来るわけだ。その点については感謝しなきゃならないな。
「そうよね。今回のオゴポゴ探索は古泉くんがいなかったら実現しなかったもの」
正確には、色々と画策しているのは古泉のバックボーンなんだけどな。
「今回の働きにより、古泉くんには五十万ポイントを進呈するわ」
「謹んでお受けします」
ちょっと待て。

そのようなわけで、古泉が件の部屋に一泊する権利を得た。俺は滞在する館に戻ってから夕飯を食う時も風呂に入る時も古泉をずっとにらみ付ける事になった。
忌々しい、ああ忌々しい。
考えてみれば、古泉の画策によってこのオゴポゴ探索旅行が実現してしまったわけであり、そもそも気が進まない俺にとってはありがた迷惑なのである。そうだ、どうして俺はこいつに感謝などしなければならないのだ。
まあ、可能な限り快適に過ごせるのは救いではある。この館には古泉の機関のメンバーがメイドや執事の扮装をして常駐しており、日本語も話せるし食事は日本で食うような感じの料理だ。ここがカナダである事を忘れてしまえば、ちょっとホテルにでも滞在しているような感覚ではある。
今晩は五十万ポイントを獲得した古泉が豪華な寝室で一泊である。荷物を持って古泉がいなくなった部屋で、俺は電気を消して一人惨めな気持ちで毛布をかぶって布団の上で丸まっている。こんな時はさっさとふて寝してしまうだけだ。
トントン――
古泉がいなくなってしばらくして、ドアがノックされた。何か忘れ物でもしたのか？
「開いてるぞ」
ベッドに転がったまま返事をすると、音を立てずにドアがすーっと開いていく。
「……」
俺は、言葉を失った。逆光で表情などはわからないが、そこにいたのはパジャマを身につけた長門だったからだ。
「一体、どうして？」
「あなたがそろそろ限界だと思ったから」
さすがに俺の体の事をよくわかってるな、長門。しかし、どうして？
「あなたが一人ならどちらでも良い」
冷静に考えれば……例の部屋に行くのは俺じゃなくて古泉でもいいんだよな、結果的には一人部屋

になるんだから。すっかり失念していた。
加えて言うと、長門がその部屋に行くってパターンもありうる。つまり、ハルヒと朝比奈さん以外の誰かが獲得すれば良いわけで、結局のところ二人きりになる方法などいくらでもあるのだ。
「入っていい？」
「ああ、もちろんいいぞ。誰かに見られたら大変だからな」
しかし、長門はその場を動かない。
一体、どうしたんだ？
「エスコートして欲しい」
その言葉を言った長門がどんな顔をしているかはこちらからはわからない。しかし、俺はくすっと笑うと、ベッドを下りて長門のところに行き、いわゆるお姫様だっこで部屋に入れるのであった。

さて、そのようにして俺達は二人っきりの甘い夜を過ごすことになった。残念ながらその夜に関してはここでは述べる事が出来ない。具体的に何をしたかはご想像にお任せする。
「主にセックスをした」
そうだな。

7

目が覚めた時に腕に重みがあると、なんとなく心が満たされる。
チラリとそちらに目を向けると、目を閉じた長門の顔がすぐ近くにあった。スースーと寝息を立てて心地よさそうに眠っている。
生まれたての赤ん坊のように安らかな寝顔。こいつの為だったら何だって出来るね、うん。
「ん――」
露わになっている首筋をそっと触ると長門がくすぐったそうに肩をすくめた。ちなみに生まれたての赤ん坊のようなのは寝顔だけでなく、服を着ていないあたりも生まれたての赤ん坊のようだ。どうして長門が全裸で俺の横に寝ているかというのは、まあ、敢えて説明する必要はないよな。
「……」
目をパチリと開け、長門がキョロキョロと見回し、
「おはよう」
ぺこりと頭を下げる。
「ああ、おはよう」
頭を撫でてやると嬉しそうに頭を手に押しつけてくる。体の方は乾いたようだが、髪の毛はまだじっとりと汗ばんでいる。
まあ、髪が濡れているのは自分も同じだろう。後でシャワーでも浴びなきゃならないな。
ついでにシーツもじっとりと湿っているから、干して置かないといけないな。だがまあ、まずは服を着てから飯を作って――ん？
何か、大事な事を忘れているような気がした。
「長門、お前、こんなシーツ持ってたっけ？」
「持ってない」
そうか。奇遇だな、俺も持ってないぞ。

ドンドン！

乱暴にドアがノックされる音。その音でドアの方に顔を向け、ここが自分の部屋でも長門の部屋でも無い事を思い出す。
「キョン、有希がどこにもいないのよ！」
ここにいるぞ。
なんて言えるはずはない。さて、どうしたものか。
「あんたも探してよ！　開けるわよ」
「待て！　ちょっと待った！」
今この場に踏み込まれたら間違いなくジエンドだ。あれでもハルヒは団長として団員の身を気にしているふしがあるので、俺が長門をたぶらかしたと思って殺されかねん。
「着替えてるから待ってくれ」
「五分で終わらせなさい！」
その言葉から、五分後には有無を言わさずドアを開ける気なのが伝わってくる。まあ実際全裸なわけで服を慌てて身につけるが、それと同時に長門をどうするか考えねばならない。

当の本人はぼんやりした顔でのろのろとパジャマを身につけているが、その動きの遅さからまだ完全に覚醒していないという事がわかる。この様子じゃ、窓から逃がそうにも転落しかねない。

……本当にどうすればいいんだ？

「ほら、もう一分経ったわよ！」

参ったな、どうすりゃいいのか全く思いつかない。かといって長門と相談してハルヒに聞き咎められても困るし、相談する事も出来ないだろう。

「二分！」

なんとか服は身につけた。長門の方は下着も何も身につけず、パジャマの上だけを羽織って、

「どうする？」

「ちょっと、今なんか有希の声しなかった⁉　ドアを開け――」

「俺の声だ！　まだパンツ履いてないからそこで待ってろ！」

履いてないのは長門だけどな。

ともかく、ガチャガチャとドアノブを回していたハルヒだったが、さすがに下半身が裸という状態では入ってくるのが躊躇われたらしい。少しだけほっとする。

「てか、あんたなんでパンツ履いてないのよ⁉」

「ノーパン健康法だ！」

よくわからないが、俺が生まれた頃にそんな健康法が流行したらしい。北海道を発祥に全国に広がったそうだが……いや、そんな事はどうでもいい。

ともかく、長門をどこかに隠さねばならないのだが、クローゼットの中やベッドの下などのありきたりな場所ならなんとなくハルヒに見つかりそうな気がする。理由はわからないが、なんとなくだ。妹と違ってカバンの中に入るほど小さくはない。

そうだ、あの中なら――

「長門、ちょっとあの中に隠れてもらえるか？」

耳に口を寄せて囁きかけると、

「いい」

と普通に答える。

「ちょっと、今なんか有希の声しなかった⁉　ドアを開け――」

「俺の声だ！　まだパンツ履いてないから待ってろってば！」

ハルヒが最初に声をかけてきてからほぼ五分後、ドアがゆっくりと開かれる。

「ガチャガチャすごい音がしたけど何なのよ？」

「パンツを履いてたんだ」

「ふうん」

ハルヒはキョロキョロと部屋の中を見回し、

「なんか、この部屋じめじめしてない？」

一晩中、大量の汗や汁や液が蒸発していたから仕方がない。窓も開けていなかったし。

「あんた……寝汗ひどいの？」

ハルヒはぐしゃぐしゃになったシーツをじっと見ている。

「うなされたんだよ」

「ふうん」

まあこれは、一人分じゃないからな。体を動かしていたのもある。

なんて事はもちろん言えない。

「キョン、なんか隠してない？」

「別に？」

ハルヒは俺の顔をじっと見ながら、スタスタと部屋の中を歩き回る。あ、そっちは――

「このあたりね」

まずい、ばれた。

「隠すとためにならないわよ、キョン」

場所を大体特定したとは言え、どこに何があるかはわからないのだろう。一安心――

「あら、このにおい……」

ハルヒはまるで見えているようにそちらに近寄っていく。やばいやばいやばいやばい！

ハルヒの手が、ぺたりとそれに触れようとした時、

ガシャン。

「きゃっ」

ハルヒが思わず尻餅をついた。そりゃそうだ、置物の西洋甲冑が突然動いたんだからな。西洋甲冑はガッツポーズをするように両手を上げ、ハルヒの方に頭部を向けている。

まあ、もちろんその正体は長門である。咄嗟に中に隠す場所がここしかなかったわけだ。

「ゆ、幽霊だっ！」

「えっ、幽霊っ!?」
俺が叫ぶと、ハルヒはビックリしたような顔で俺と西洋甲冑（長門）を交互に見る。よし、これでハルヒはこの中に長門が入ってるなんて思わず、幽霊の仕業だと思うだろう。
しかもハルヒは腰が抜けているようで、立ち上がりそうな気配がない。
「ゆ、幽霊が逃げるぞ！」
あとは、西洋甲冑（長門）がこのままどこかに逃げ切ってしまえばいいのだ。
西洋甲冑（長門）はガシャンガシャンと足音を立てて、歩き――
グシャ。
あ、転んだ。
コロ――コロ――
その頭部が地面を転がる。空洞の中から、こちらを見ている長門と目が合った。
「デュ、デュラハンだ！」
よかった、長門の背が低くて本当によかった。ハルヒの方からはアイルランド産の首無し騎士に見えているだろう。本当によかった。
長門は鎧が重いのか、床の上でジタジタともがいている。まずい、このままではハルヒが復活してしまう。
「大丈夫かデュラハン！」
俺は西洋甲冑（長門）の体を起こす。さすがに重い。重くてたまらない。何キロあるんだこれ？
しかし、今はそんな弱音を吐いていられない。いわゆる火事場の馬鹿力とやらで西洋甲冑（長門）の体を抱き起こしてやった。
「幽霊が逃げるぞ！」
ガシャンガシャン――
金属音を鳴らしながら、ようやく西洋甲冑（長門）は部屋から姿を消した。
その後、
「なんで幽霊を逃がしたのよ！」
腰の抜けたハルヒを背負い、俺はしばらくぼかぼかと頭を殴られる事になった。
ちなみにその日は昼過ぎまでＳＯＳ団だけでなく機関の方々も総動員で例の首無し鎧をホテル中くまなく探す事になったが、もちろん見付ける事は出来なかった。

8

あれから何日が経過しただろうか。
最初は大いに不満を抱いていたカナダでの生活だったが、俺は徐々に慣れ始めていた。
昼間はボートで湖に出てオゴポゴの探索。魚群探知機を使って魚影を見付けると水中カメラを下ろし、それが魚の群である事を確認して待機。最初の数日は目を皿のようにしてモニターを覗いていたが、わざわざ一日宿泊権を得なくても長門と過ごす事が出来るとわかったし、あまりに変化がないので俺はモニターの向きを変えて他のメンバーとのゲームに混じるようになった。一応、常にチラチラとは気にしているので、職務を完全に放棄したわけではない。
最初はトランプだけだったゲームだが、いつしかその数も増え、今やテントに置かれたケースに大量に詰め込まれている。ＳＯＳ団のメンバーとボードゲームなんぞを囲んでいると、ここがカナダである事を忘れてしまうくらいだ。
事実、やっている事は普段と大差ない。朝比奈さんはお茶汲み用にポットやカップも積み込んでいるし、ハルヒはオゴポゴ探索のための情報収集用と称してノートパソコンを手に入れてインターネットをすることが出来るようになっており、長門はどこからともなく本を出すので問題ない。
「ポケットから」

そうだな。

天気の良い日は湖の上で過ごすが、あまり天気の良くない日は街に出かける事もある。買い物の為の簡単な単語くらいは使えるようになったし、機関のメンバーが通訳で付いてきてくれるので、本格的に困る事は無い。最初の頃は長門に例のこんにゃくをもらって外国人とペラペラ会話できる事に喜びを覚えたりしたもんだが、もう慣れてしまってそのような事もしなくなった。

夜は飯を食って風呂に入って寝る。長門と二人きりになる事が出来るのは、俺か長門か古泉が例の豪華な寝室に泊まる事が出来た場合だ。ハルヒ自身がその部屋に泊まる事は滅多にないし、縁の下の力持ち的に雑用をこなす朝比奈さんがその権利を得る事も滅多にない。それに、仮にその二人のどちらかがその部屋に泊まる事になったとしても、俺と長門は合図を決めておいてみんなが寝静まってから逢い引きするようになった。

結局のところ、毎晩のように長門と過ごしている。

海外旅行では飯がまずいとよく言われているが、今回の場合は機関のメンバーが作ってくれているので食に対する不満もない。たまにあまり日本じゃ見かけない魚が出てきたりする事もあるが、調理自体は日本で食うような感じなので問題ない。

今の生活に、不満は無かった。

今日は長門が変則五人打ち麻雀で勝利し、この部屋の権利を獲得していた。貢献度だけでなく、ゲームの勝敗でも権利を獲得する者が決まるようになっていた。

麻雀の方は、別に長門はインチキをしたわけではないらしい。ただ捨て牌や捨てる癖から相手の手がかなり特定できるのだそうだ。この辺りは熟練者なら到達しうる域らしいのだが、長門の記憶力や計算力はそこらのスーパーコンピューター以上である。そんなもんに、俺達素人が勝てるはずもない。

ハルヒだけは運で食らいついたりもするのだが、まあ、結局は長門の勝利で終わった。

ともかく、この部屋は広くてベッドも柔らかくて風呂も完備されて、まるでホテルのスイートルームのようだ。いや、スイートルームなんぞに泊まった事はないんだが、恐らくこんな感じなんだろう。

「なあ、長門」

暗い部屋の中、俺は隣で横になっている長門に声をかける。

「……なに？」

少し遅れて答えが返ってきた。眠っていたわけではないが、そろそろ眠くなってきていたのかも知れない。悪いことをしてしまったな。

「いつ帰れるんだろうな」

不満は無いのだが、この生活に慣れすぎて堕落しているような気がした。やはり普通じゃないよな。

「安心して」

不意に、きゅっと頭が圧迫される。温かい。

「心配しなくていい」

まるで母親に抱かれるような安心感。長門の腕に包まれ、それを感じていた。俺より体の小さな長門だが、こういう時は妙に包容力があったりする。

「夢オチだから」

そうなんだよな。

目覚ましが鳴り、俺は長門がまだ眠っている事を確認し、ベッドから抜け出す。

ここでの生活の中で、唯一不満があるとすればこの瞬間だ。いや、もう一つあった。一緒に眠ったはずの長門がいなくなっていると気付く瞬間。

そう思うと、やはりこの生活は続けるべきではないような気がしてくる。

古泉は、ハルヒが俺に期待しているとか言っていたな。つまり、本当に見付けたければ俺がもう少し頑張る必要があるって事だ。

「よし」

頬を軽く叩き、俺は自分自身を鼓舞する。今日こそはオゴポゴを見付けて、この妙な生活を終わらせてやろう。

「見付けようと思って見付けられれば百年以上も未確認生物のままではいない」

ま、そうなんだけどな。

俺はふうとため息をつき、まだ寝たふりをしている長門の頭をそっと撫でてから部屋に戻ることにした。

9

「キョン、気合い入ってるじゃない」
朝飯の時に顔を合わせたハルヒが俺を見てそんな事を言ってきた。
しかし、よくわかるもんだ。なんだかんだ言っても、それなりに団員の事は気にしているって事か。
「いい加減オゴポゴを発見して、こんなところからはおさらばしようと思ってな」
「……え？」
何だ今の間は。何となくダラダラここで過ごしているが、そもそもの目的はオゴポゴだよな？
「そう……そうよね。なんかバカンスを満喫しちゃっていたわ」
俺自体もここの生活にそれなりに満足していたから、あまり強くは言えないのが切ないところだ。
「キョン、よく言ったわ！　団員の鑑よ！」
褒められているのはわかるのだが、あまり嬉しくはない。何故だろうね。
「総員、今日は気合いを入れて各自の任務に当たるように！」
とはいえ、気合いを入れるとは言っても、実質的に動いているのは俺と古泉だけである。俺は普段よりも細かく魚群探知機の設定を変更し、古泉は普段よりも速度を上げつつも、紙コップに入れた水がこぼれないくらい安定した状態でボートを動かしている。
「気合いを入れてお茶を淹れました」
それはギャグなんでしょうか、朝比奈さん。
「違います。さあどうぞ」
事実、その紅茶は普段以上にうまかった。
「紅茶を美味しく淹れる秘訣は、お湯の温度なんですよ」
こんな環境でよくそこまでやりましたね。ここにはポットしか無いというのに。
「わたしも気合いを入れて本を読んでいる」
そう言う長門の本を読むペースは、確かに普段よりは少々速いような気がするのだが……すまん、正直よくわからん。
「速度に差はない。気持ちの問題」
そうか。
ともかく、団員達はそれぞれ気合いを入れてそれぞれの職務をこなしているようだ。
ちなみにハルヒはというと、
「ソリティアって三枚ずつだと難しすぎるのよ！」
本人が一番気合い入ってねえ。
いやまあ、俺と古泉以外はどう頑張ってもオゴポゴの発見には直接的に関係ないから別にどうでもいいんだけどな。
「キョン、それ何？」
ハルヒがふらりと立ち上がると、こちらに向かってきた。どうやらパソコンに飽きたらしい。以前にも何度かこんな事があったな。
「ハルヒ、また機械の説明をしろってのか？　散々しただろ」
「違うわよ。これよ、これ！」
と、ハルヒが指差したモニターには、
「なんだこりゃ！」
思わず大声が出てしまう。
魚群探知機に、何か巨大な影が映っていたのだ。しかも、ゆっくりと動いている。これは魚の群なんかではあり得ない。間違いなく、何かがいる。
「古泉停めろ！」
俺の言葉を受け、ボートはドリフトのような動きをしながらその場でくるりと一回転。そして停止。
駆け寄ってきた古泉と二人がかりで水中カメラを持ち上げ、湖の中に投げ入れる。
「キョン、オゴポゴなの？」
俺にもわからないが、今まで何日も探していたがこんな事は無かった。これは、ひょっとすると……
魚群探知機や水中カメラの操作法なんかは完全にマスターしている。両方のモニターを確認しながら、見付けた巨大な影を確認するため、手早くカメラを下ろしていく。
しばらくして、そのポイントにカメラが到達した。
「キョン、何もいないじゃない！」
いや、カメラの向きが悪いだけかも知れない。俺は角度を変えるように操作し――
「な、なにかいますぅ！」
朝比奈さんがそれを見て絶叫。いつの間にかモニ

ターの前には全員が集まっていた。
モニターには、真っ黒な巨体が映し出されていた。つるりとして黒光りしており、巨大な鮫という説も間違いではないのかも知れないと俺は思った。
しかし、それにしては……少々、つるつるとしすぎていないか？
発見したそれは、スッとカメラから消えた。
「キョン、追いなさい！」
とは言うが、そう簡単にはいかない。上の方に逃げたように見えるが……
カメラを上に向けると、再び先程のオゴポゴらしきものが映し出された。カメラより高い位置に移動して、更に上昇を続けているようだ。
手早く操作し、俺はカメラを水面に向かって移動させるが、オゴポゴらしきものはそれよりも更に急上昇しているようだ。
このままでは逃げ切られると思ったその時――
ザバァ！
突如、ボートの横で水音が聞こえた。カメラのモニターを見ていたので気付いていなかったが、どうやら水面に現れたらしい。
「え？」
そちらに視線を向けると、そこには明らかに人工物がぷかぷかと浮かんでいた。小型の潜水艦、だろうか？
俺達が呆気にとられていると、パカリとその上部が開いた。そして……

「やあっ、久しぶりだねっ！」
鶴屋さんが顔を出した。
「いやー、みんながいないと退屈でねっ！」
事情を聞くと、鶴屋さんはここに来た理由をそのように簡潔に説明してくださった。鶴屋家の財力ならば、カナダに来るのも、潜水艦程度も買うのもそれほど高くないって事か。
「怪紳士に体を売って稼いで買ったのさ……」
途端、表情を曇らせる鶴屋さん。目のハイライトが無くなっていて、ガタガタと震えている。
どうやら、安くはなかったらしい。
「なーんてねっ！」
表情がくるりと一転し、ケラケラと笑う鶴屋さんに、俺は呆気にとられた。
「今日からこの潜水艦も仲間に入れてあげて欲しいさっ！　戦力になると思うにょろっ！」
「そうね、確かにオゴポゴを生け捕りをするなら、これくらい必要ね。さすが鶴屋さん、あたしの見込んだ準団員よ！」
何やらハルヒは感激しているようだ。しかし、本気で生け捕りにする気なのか？
しかしまあ……これは一体、どういう事なんだ長門よ。あまりに唐突すぎないか？
「気合いを入れてテコ入れ」
そうか。

10

鶴屋さんが持ってきた潜水艦だが、オゴポゴを警戒させてしまう可能性があるとのことで普段は別行動をしている。鶴屋さんには、湖底に怪しい地形がないかなど、上からでは困難な部分を担当してもらっている。
また、こちらがオゴポゴらしきものを発見した場合は、潜水艦で追い回して捕獲用のネットの方に誘導することもあり得る。
「色々仕込んであるからねっ」
そう自信満々で言っておられた。武器でない事を切に願う。
水中の鶴屋さんとの連絡は長門がどこからか取り出した携帯型テレビ電話で行う事になった。
「ポケットから」
そうか。
「二十二世紀の技術力を用いた携帯型テレビ電話。電力や電波については気にする必要はない」
更にコードを接続する事により、こちらのモニターの情報や、あちらの情報が交換できるらしい。さすがだな、二十二世紀。
長門の説明の最中、朝比奈さんは苦笑していた。朝比奈さんにとって、この携帯型テレビ電話は未来にあたるのか過去にあたるのか。
「ただし、二十二世紀の技術による妨害電波を受けた場合の動作は保証しない」

と、長門はチラリと朝比奈さんの方を見る。
二十三世紀の人なのか？
「知らない」
これについては深く追求しない方が良いだろう、恐らく。
ともかく、携帯型テレビ電話は現在ハルヒが面白がって鶴屋さんと無駄に交信している。特に何も無ければ船上も水中も暇だろうし、データを送る必要が生じるまでは放っておこう。
「あ、そうだ。鶴屋さん今日はすっごい部屋に泊めてあげるわ！」
ハルヒの言葉に、嫌な予感がした。
考えてみれば、これで男二人に対して女性陣は四人となる。そして、現在使える寝室が三つ……
ハルヒと鶴屋さんの話に耳を傾けていると、男一部屋に女二部屋という部屋割りになっていくのがわかった。こうなると、今までのように長門と甘い夜を過ごすのが難しくなる。
いや、今までだって何度か部屋以外で逢瀬を重ねた事はあるのだが、実はそれはスリリングなものだった。みんなが寝静まった後の風呂場で、屋上で、庭で、ベランダで、ボートの上で、路地裏で、とバリエーション豊富ではあるのだが、いかんせんリスクが高い。危うく見つかりそうになった事は一度や二度ではない。三度だ。
「……」
長門が本を開いたまま、こちらに顔を向けているのに気が付いた。やはり、同じ事を懸念しているのだろう。
こうなったら、一刻も早くオゴポゴを発見しなければならない。やり場のない高ぶりをため込んでしまう事になるからだ。
てか、もういいだろ？　ゴールしてもいいよな？
「な、何かいるにょろっ！」
そんな俺の祈りが通じたのか、鶴屋さんの叫びが響き渡った。
「何があったの！」
ハルヒが携帯型テレビ電話に食ってかかると、鶴屋さんは何やら向こうでバタバタやっている。
「今、カメラの映像をそっちに送るよっ！」
鶴屋さんがそう言うと、ぷつんと映像が一瞬切れて、何やら水中の映像になった。
薄暗く、何やら影のようなものがあるような気がするが、よくわからない。
「キョン、もっと見やすくしてよ！」
俺に言われても困るんだが……
「モニターに繋げばいい」
そうか、サンキュー長門。
「もっと褒めて」
よしよし。
「早く繋いでよキョン！」
ハルヒに怒鳴られ、俺は長門の頭から手を離し、慌ててモニターのコードと繋ぐ。
それで映像がモニターに映し出されるが、やはり見づらいことには変わりない。明るさなどを調整するものの、こちらの操作では限界があるようだ。
「あ、ライト点けるよっ！」
テレビ電話からそんな声が聞こえた瞬間、
「なんだこりゃ！」
モニターに奇妙なものが映し出された。
水底を、二本足の何かが歩いているのがぼんやりと見えた。人間がいるはずもない。それはまるで、いわゆる半魚人とでもいうかのような風体だった。
「長門、アレは人間か？」
近くにいた長門の耳に唇を寄せると、
「くすぐったい」
と、首を引っ込めた。
「でも……いい」
いや、そんな場合じゃないんだが。
「人間ではない」
となると、あれは……やはり……
「近寄ってくるよっ！」
字面ではわかりづらいのだが、鶴屋さんの悲痛な声が聞こえた。人間ではないらしい何かが、水底を歩いて鶴屋さんに近付いてくる。しかも、物陰に隠れていたのか、もう一体現れた。
頭部にひらひらと、何か海草のようなものが付着しているように見える。二体はカメラに近付いてきて……カメラに向かって手を振った。
なあ長門、どう考えても潜水服を着た人間のようにしか見えないんだが……

「人間ではない」
じゃあ一体？
「朝倉涼子と喜緑江美里」
時間も遅くなったので、その日の捜索はそこで終了になり、俺達はテントに戻っていた。
「ちょっとこっちに用事があったの」
ハルヒの質問に朝倉がそう答えた。
「父の葬儀の関係で」
と明らかな作り話をする朝倉に、ハルヒは半べそでうんうんと首を振っていた。相変わらず、朝倉はハルヒの扱いが上手である。見習いたいくらいだね。
「で、あなたはどうして来たんですか？」
他のメンバーに気付かれないよう、こっそり喜緑さんに声をかけると。
「テコ入れその二です」
と、答えて下さった。
やれやれ、この勢いじゃまだ増えそうだな……困ったもんだ。
「安心して」
長門は俺の肩をぽんと叩き、
「その予感は正しい」
そうか。

11

鶴屋さんだけではなく、朝倉と喜緑さんが合流し八人の大所帯となった。だが、幸いな事に元々女性部屋は広く、例の部屋もあるので収容は問題ない。
「クジで部屋割り決めるわよ！」
などと言って、ハルヒが女性陣と輪になってあみだくじを作っている。もちろん俺と古泉は蚊帳の外。
「なあ古泉、かなり人数が増えたが飯代とかは問題ないのか？」
「ここに常駐している人員の数に比べると微々たるものです」
確かに、メイドや執事のような人間が飯や風呂の準備などをやってくれている。金が出ているとは思うが、こんなアホな事に付き合わせちまって申し訳ない。
「長々とすいませんね」
皿を片付けていたメイドの一人に声をかける。
するとそのメイドは、こちらに向かってニコリと笑い、
「いえ、お気遣いなく」
と返してくれるものの、いい加減なんとかしなきゃならないよな。
などと思っていると、
「森園生です。以後よろしく」
そのメイドさんは、何故か名前を名乗ってから去って行った。

どうして、今さらになって？
「あなたが物欲しそうな目で見ていたからではないでしょうか？　かけがえのない仲間ですので、粗相の無いようにお願いします」
おかしな事を言う古泉の頭を、軽く殴っておく。ま、本気じゃないのはわかってるけどな。
そもそも、俺には長門というものがいるのだ。他の女性に手を出す事などあり得ないわけである。
「……」
いつの間にか部屋割りが確定したのか、戻ってきた長門が俺の服を引っ張った。
一体どうした？
「彼女もテコ入れ要員」
そうか。

長門のその言葉がどうやら嘘ではなかったらしい事が、風呂に入った時にわかった。
ここにはシャワーの付いている部屋もあるが、基本的には大風呂を使っている。男女別で時間を区切って利用しており、今は男の順番だ。
「おっと」
風呂が終わって着替えをしようとしたところで、メイドさんに出くわした。
「きゃっ」
もちろんこちらは全裸であり、メイドさんの方は両手で目を覆って、手に持っていたバスタオルを取り落としてしまった。

手伝おうにも、股間をタオルで隠しているので手が使えない。さて、どうしたものか。
「手伝います」
と、フルチンで爽やかに手伝う古泉。少しは隠そうとしてくれ。
「大丈夫です、彼女は完璧なメイドを演じているだけですから。ドジっ子担当なんですよ」
とはいえ、女性の前に股間を晒せるほど俺は特殊な性癖を持っていない。
「手伝いましょう」
と、飯の時は執事の服装だった中年の男性が俺の横をスッと通りタオルを拾うのを手伝う。ちなみに、俺と古泉だけでは広いので、使用人役の人物もたまに風呂に入っている。
つまり、その中年の男性も全裸である。事情を知らない者が見れば、このメイドの服装をした女性を全裸の古泉と中年男性が取り囲むという非常に奇妙な光景はどう目に映るのだろうか。

それからしばらくして、寝室に戻ると俺のベッドの布団が妙に膨らんでいた。まるで、中に人でもいるように。
長門か。
実はこのような事はたまにある。古泉には道に迷って寝室に戻れないような処置を施し、しばらく二人だけの空間を作る事が長門には可能である。その間にたっぷりイチャイチャして、長門が帰ったあとに古泉が「いやあ、迷ってしまいました」と現れて倒れるように寝込むのが通例となっている。
ともかく、俺は布団越しに長門の体をそっと撫でてから、ぱっと布団をめくり、
「ご主人様、大胆ですね」
もじもじしているメイド姿の森さんの姿を発見して硬直した。
「どうして！」
「メイドとはこのような行為をするものと本日知りまして」
彼女の手には「メイドさん大全」と書かれた本が。表紙にはいかにもアダルトゲームのキャラクターのようなキャラクターが描かれている。
参考資料が間違っています。一体、誰から渡されたんですか！
「本日いらした緑色の髪の毛をした方から」
喜緑さんかよ！

12

俺の布団の中にいた森さんだが、もちろん丁重に断って帰ってもらった。メイドさんとの一夜が惜しくなかったわけではないが、俺には長門というものがいるのだ。
俺の部屋を出た森さんが廊下の椅子で寝ていた古泉の首から何か細い物を抜き取ると、古泉は何事もなく起きて首を振りながら寝室に向かってきた。
「おかしいですね……僕、どれくらい寝ていたんでしょうか？」
さあな、一分くらいじゃないのか？
入れ違いに廊下に出て、俺はふうとため息をついて歩き出す。
喜緑さんに釘を刺しておかねばならない。このままではどこまで暴走するかわかったものではないからだ。
喜緑さんがいる寝室は……さて、どっちだろうな。部屋割りは飯の時にクジで決めていたが、誰がどの寝室になったのかは聞いていない。長門に確認しておくべきだった。
まあ、二箇所のうちのどちらかだ。とりあえず豪華な方の寝室に行っておくか。
部屋の前に立ち、ノックをする。
「誰？」
ハルヒの声が帰ってくる。
「俺だ、入っていいか？」

「待って……オッケー、いいわよ」
ドアを開けると、寝間着のハルヒが目の前に立っており、部屋の中には椅子に座ってくつろぐ朝比奈さんと鶴屋さんの姿が見えた。
しまった、こっちでは無かったか。
「どうかした？」
「いや――」
喜緑さんに用が、と言いかけて俺は口ごもる。考えてみれば俺と喜緑さんには表向きほとんど接点が無いのだ。そのまま言えばハルヒに怪しまれるのではないだろうか。
「ねえ、なんか用があったんじゃないの？」
訝しげに眉をひそめる。黙っていても怪しまれるって事か。
「いや、ちょっと顔を見に来ただけだ。悪かったな」
「え？　ま、まあいいわ。明日から人数増やして今まで以上に頑張ってオゴポゴ探すんだから、あんたも早く寝なさいよ」
「ああ、いい加減オゴポゴ見付けて終わらせないとな。それじゃあお休み」
ポンとハルヒの頭に手を置いてから、その部屋を後にする。
こちらにいない以上、喜緑さんがいるのはもう片方の部屋だ。残りのメンバーは、喜緑さんの他には長門と朝倉……何やら、よく見かける組み合わせだ。誰かの意図が働いているんだろうな、やはり。
さて、今度は喜緑さんがいるであろう部屋の扉をノック。
「入っていい」
長門の声が帰ってきた。叩いているのが誰なのかはわかっているのだろう。
さて、文句を言ってやろうと思いつつドアを開けると……
「あれ？」
寝間着に着替えた長門がいるだけだった。
「喜緑さんはいないのか？」
「今夜は、朝倉涼子と二人で街を散策すると言っていた。朝まで帰らない、と」
ふと、酒場で飲み歩いている喜緑さんの姿が脳裏に浮かんだ。なんとなくアメリカのB級映画にありそうな光景だな。
いや、ここはカナダなんだが。
「彼女に用事？」
シャツを掴み、俺の顔を見上げてくる。
もしかして怒って――いや、拗ねているのか？
「わたしに会いに来たのかと思った」
その言葉にドキリとする。本来の目的は喜緑さんであるのだが、そう言ってやればよかったと後悔した。我ながら気の利かない……
ん……この部屋、朝まで他の二人は帰ってこないんだって？
「そう。わたしだけ」
何か言いたげな長門の顔を見つめながら、俺はドアを閉めた。
一歩前に踏み出し、後ろ手で。
「朝まで二人でいても大丈夫って事か」
「そう」
目を閉じる長門の顔を見ながら、壁のスイッチを押して電気を消す。長門の体を抱き寄せ、少しだけ腰を曲げて顔を近付け……ん？
カーテンの外に、何やら人影が見えた。
「長門、ちょっと目を開けてあれを見てくれ」
「……」
チラリとそれを見た長門は、トンと音を残して一瞬で窓の前に移動、カーテンに手をかけてばさりと勢いよく上へめくりあげた。
「……」
「……」
「……」
しばらく俺達は見つめ合って沈黙する。
「こちらの事はお気になさらず続きを」
気にします。
「わっ、わたしは駄目だって言ったのよ。でも、引き留められなくて……」
そして、一緒に見物していたのか、朝倉。
もしかすると、喜緑さんが森さんをそそのかしたのは、この状況を作る事まで込みで計算だったのではないだろうか。なんとなくそう思う。
ともかく、これではどうしようもない。今日は諦めて帰ろうか……
「――」

どこかで聞いたような音が聞こえた。まるでテープを早回しにしたようなそれが長門の口から漏れたかと思うと、窓が、ドアが、壁が変質した。出入り口は消滅し、鏡のようになった。
「情報操作」
だよな。
「現在、誰もこの部屋には出ることも入ることも出来ない」
その口調は、どことなく楽しそうに聞こえた。
「明日の朝まで、出ることも入ることも出来ない」
そう言って目を閉じる長門を、俺は黙って抱き寄せた。

さて、話は翌朝になる。
目覚ましを止めた俺は、部屋がまだ鏡張りになっている事に気が付いた。どうやら長門に解除してもらわねば出られないらしい。
「なが――」
体を揺すろうとした手が、何かに掴まれる。
「疲れてるみたいだし、もう少し寝かせてあげたら？　わたしが解除しておくから」
そうだな、じゃあ頼んだ――ん？
この部屋には、誰も出入りできない……って言ってたよな？
「どうしたの？」
な、なぜ部屋の中にいるんだ朝倉！
「最初からいたの。昨晩、外にいたのはダミー」

つまり、俺達が一晩かけて色々していた行為は、全て見られて……いたのか？
でも、この部屋の一体どこに？
「やあ、中はあったかくていい気持ちだ」
そんな声がどこからか聞こえた。そちらの方に顔を向けると、鎧の隙間からにゅるりと喜緑さんが出てきた。
そして喜緑さんはニコリと笑い、
「ゆうべはおたのしみでしたね」
と言った。

13

「さあ、今日も頑張ってオゴポゴ探索よ！」
ハルヒは朝っぱらからやたらと元気が良い。普段にも増してテンションの高いハルヒを眺めながら、俺はパンを口に入れてコーヒーで流し込む。
「夜から朝にかけて元気が良い人もいますよね」
隣にいた喜緑さんが意味深に呟いてニコニコと笑う。はて、何の事でしょうね。
「二回目までが特に元気がいい」
わざわざ説明しなくてもいいぞ、長門。
それになんだ、その言い方だと後半はどんどん駄目になっていくみたいじゃないか。
「そうではない」
長門は首をわずかに左右に振り、
「三回目以降は一般人並み」
などと言った。
つまり、俺は最初の二回は常人以上だとでも言うのか？
「言う」
そうか。
「キョン！　おしゃべりしてないで早く食べて探しに行くわよ！」
へいへい。
ハルヒは妙にやる気になっているようだ。この様子だと、今日あたり本当に見つかるかも知れないな。
誰かさんのテンションで結果が左右されてしまう

世界ってのは、本当に妙なもんだな。
ま、良い傾向ではあるんだけどな。いい加減、カナダに来てダラダラしすぎた。そろそろ、このふざけた旅も潮時だろ？
「……」
何やら、長門がじっとこちらを見ている。何か言いたい事でもあるのか？
「別に」
視線を前に戻し、黙々とパンを口に運ぶ。
……何だったんだ？

朝飯が終わり、俺達はオゴポゴ探索に向かう。
鶴屋さん達と通信をするため、ボートには新たにモニターを設置する事になった。機関の人々が運び入れ、配線をしている。毎度ながらありがたい。
「古泉、また金かかったんじゃないのか？」
「ええまあ。でも、問題のないレベルです」
なら良いけどな。
モニターの設置と同時に昼食用の弁当も積み込まれる。バスケットを持って歩いていた森さんが、俺を見てぺこりと頭を下げた。
「それじゃあ、各自全力を尽くすのよ！」
準備が終わったところで、ハルヒの号令により本日のオゴポゴ探索が始まった。
俺達団員は今まで通りにボートに乗って水上から探索、鶴屋さんは例の小型潜水艦で水中を潜航し、そして朝倉と喜緑さんは潜水服を身につけて水底の調査にあたる。新しく設置されたモニターには鶴屋さんの潜水艦に搭載されたカメラからの映像が表示されており、別のモニターにはカーナビのような画面にボートや潜水艦や潜水コンビなどの位置が表示されている。
しかし、かなり機材が増えたもんだな。これでも駄目なら……カナダに永住しろって事かね。
ふうとため息。そうならない事を祈るだけだ。
「……」
視線を感じて顔を向けると、長門が俺の方を見ている。
まだだ。何か言いたいことでもあるのだろうか。
「長門――」
「キョンくーん、ちょっといいかなっ？」
突然モニターが切り替わり、鶴屋さんの顔がアップで表示される。
「鶴屋さん、どうしたんですか？」
「これ怪しいと思わないかいっ？」
カメラの位置が変わると、何やら湖底の側面に裂け目があった。かなり大きい。
「あたしの潜水艦じゃここに入るのはちょっと無理っぽいんだよねっ、二人に頼んで調べてもらえないかなっ？」
「わかりました」
位置情報を見ながら、通信先を朝倉と喜緑さんに切り替えると、
「聞こえてたよ。それじゃ、今から向かうね」
何も言わなくても話が通っていた。心強い限りだ。
モニターに表示された青と緑の点を見てみると、何やら猛スピードで潜水艦の方に動いていた。頼むから人間レベルの速度で移動してくれと言いたい。
「ここですね」
モニターの中で、潜水艦と青と緑の点が重なっていた。一瞬で到着してしまったな。
「喜緑さん、中はどんな具合ですか？」
「もう、こんな時間からエッチな質問ですねえ」
違います。
「裂け目の横幅はそれなりにありますが、ちょっと曲がってるから確かに潜水艦では無理ですね」
「奥まで見てもらえますか？」
「わかりました」
鶴屋さんのカメラに切り替えると、二人の姿が裂け目に吸い込まれていくのが見えた。それを見届けたところで鶴屋さんはその位置を離れ、別の場所へ向かう。
「これ、入口のわりにはなかなか大きな洞穴ね」
朝倉の声が聞こえる。これはひょっとして、期待できるのか？
「あ、行き止まりに着きました」
しかし、すぐにその期待が打ち砕かれる。
「分かれ道とかは無かったんですか？」
「一本道でした」
期待していたんだが、駄目だったか……
「ちなみに、そこはどんな感じですか？」

「そうですね……ちょっとした広間のようになっていて、魚も多少いますね」
「他のところにいるのと似たような魚が多いかな。あ、さっきここまで到着するまでの間にちょっと大きいのとすれ違ったよ」
「どれくらいだ？」
「大体十五メートルくらいかな」
そうか。そいつはでかいな。
「長門、オゴポゴってどれくらいのサイズだったか覚えてるか？」
「五から十五メートルと言われている」
そうか。
「――って、それがオゴポゴだ！」
俺の言葉にハルヒが立ち上がり、ボートをグラグラ揺らしながらこちらに詰め寄ってくる。
「古泉くん、急いでそっちに回して！」
「了解しました」
ボートが急発進。立っていたハルヒが足下をもつれさせてこちらに倒れてきたので、なんとか受け止める。
「あ――」
更に、なぜか立ち上がっていた長門も倒れ込んで来て、さすがに支えきれず背中を打ち付けた。
さて、そのように船上は大パニックなわけであるが、通信機からは「ああ、あれがオゴポゴだったんですね」などと呑気な声が聞こえてくる。
「あたしもすぐ戻るよっ！」

モニターの中で鶴屋さんが急旋回。先程の裂け目が遠くに見える。
例の裂け目から、するっと何かが飛び出した。遠すぎて正体はわからなかったが、細長い蛇のような何かに見えた。
「何、今の!?」
俺の体にのしかかったままハルヒが息を荒げる。
いいから早くおりてくれ。
何やら、くいっと服が引っ張られた。
「……」
どうした、長門。
「明日、最終回」
そうか。

14

モニターには、裂け目から出た巨大な生き物を追って朝倉と喜緑さんが足にモーターでも付けているようなスピードで飛び出したのが映し出された。そのまま高速で動き続ける二人の位置を緑と青の点で確認しながら、俺は鶴屋さんと古泉に指示を出す。鶴屋さんのカメラを通して見た映像では大きくて細長い生き物としかわからなかったが、恐らくあれがオゴポゴなのだろう。
「鶴屋さん、あれは何に見えましたか？」
「ごめんっ、あたしからじゃ遠すぎて見えなかったによろよっ」
まあ確かに、鶴屋さんに見えていたとしたら、カメラを通して俺達にも正体がわかっただろう。
「朝倉はどうだ？」
「うーん……すれ違っただけだからよくわからなかったかな」
「喜緑さんは？」
「オゴポゴに見えました」
……そう思ったのなら、すぐ教えてくださいよ。
「キョンくんっ、オゴポゴの位置を教えて欲しいによろっ！」
「朝倉と喜緑さんがそこから百メートルほど北にいますが――」
「オッケー、クロックアップ！」
次の瞬間『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ！』と電子音が

聞こえたかと思うと、モニターの中に朝倉と喜緑さん、そしてその向こうに黒い小さな点。
何が起きたのかと位置を確認すると、先程まで二人から大きく離されていた鶴屋さんの潜水艦が、朝倉と喜緑さんのすぐ近くにあった。
鶴屋さん、あなたはその潜水艦に一体何を搭載したのですか？
「マスクド・ライダーシステムにょろっ、今のは高速で移動する機能さっ。まだ実験段階で使いこなせてなくてゴメンよっ」
どこかで聞いたことのある名前のような気がするが、敢えて気にしないでおこう。
「他にもすごいジャンプとかすごいキックとか機能満載さっ」
潜水艦がどのようにジャンプしてどのようにキックするのかはわからないが、なんとなくオゴポゴ探索には役立たないであろう事がよくわかった。
「そんな事ないよっ、生け捕りにする時に峰打ちで気絶させるとかっ」
キックでどう峰打ちにするんですか。
「あ、曲がったみたい」
朝倉の言うように、カメラに映し出される小さな点が一瞬だけ細長くなり、画面の横の方に消えてしまった。朝倉と喜緑さんの動きを見る限り、それはこの船の進行方向に向かっているようだ。
「古泉！」
「了解しました」
ボートの速度が上がる。鶴屋さんのカメラの映像と、朝倉と喜緑さんの位置を見る限り、この方向で間違いないだろう。
しばらくして、魚群探知機に細長い影が見えた。この船で探索できる距離まで近付いてきたらしい。
「掴まっていてください！」
古泉がそう言った直後、船が滑るようにして旋回。船首がオゴポゴらしき生き物の方に向いた。
モニターがぐらりと揺れて台からずり落ちかけるのを、俺はしがみついて押さえた。ボートの位置に向かってくる生き物の様子が――ん？
先程よりも位置が高い。水面に向かっているのか？
「ハルヒ、オゴポゴの姿を見ることが出来るかも知れないぞ」
「それくらい当然よ！　目的は生け捕りなんだから、忘れちゃ駄目よ！」
へいへい。
まあ、朝倉や喜緑さん、そして長門がいれば不可能ではないかも知れない。
「長門、水面に出てきたら頼むぞ」
「……」
ハルヒに聞こえないように小声で言うと、長門は小さく首を縦に振った。これほど心強いものもない。
徐々にオゴポゴらしき物が水面に近い位置に上がってくる。
あと五メートル、四メートル――
「何か見えますぅ！」
朝比奈さん指差す方を見ると、大きな黒い影があった。黒い何かが、急速でこちらに――
ドン！
突如、突き上げるような衝撃。船が大きく揺れる。
その衝撃で不安定になっていたモニターが、ざぶんという音と共に水の中に吸い込まれて――
「おっと！」
足が何かに引っ張られる。チラリと見ると、モニターのコードが足に絡みついていた。そして俺は、モニターと共に湖に吸い込まれてしまった。
「キョン！」
ハルヒの悲痛な声は、ごぼりという音にかき消された。息苦しい。前にも入った事があるが、体が冷たくて仕方ない。
モニターが重いのか、俺は下の方に引っ張られていく。水上に上がろうともがく俺の目の前に、何か黒いものが見えた。
大きく開いていた口が、俺に向かってゆっくりと閉じ――

エピローグ

「うわあっ！」

俺は真っ暗な世界にいた。はあはあと荒い息が俺自身の耳に入る。

どうやら、うなされていたらしい。当たり前に呼吸が出来る事がこれほど幸せだとは思わなかった。

また、あの夢か……

時計は深夜三時。あの夢を見る時は、決まってこの時間だ。

「大丈夫？」

パチリと音が鳴り、電気が点いた。長門が俺の顔を見つめている。

「あ、起こしちまったか？」

「気にしないで」

長門はそう言って、俺の頭を抱きしめてくれた。

「大丈夫」

ぽんぽん、と背中を叩く。まるで母親に抱かれる赤ん坊になったようだ。

「夢だから」

長門には理由がわかっているらしい。いつもの事ながら、頭が下がる。

悪夢から目覚めて、長門に助けられた事はもう何度になるかわからない。本当に感謝している。

思えばあの時も、俺を助けてくれたのは長門だった。オゴポゴに襲われた俺を救い、ボートの上まで引っ張り上げてくれた。

長門はその代償に、その夜に眠ってから目覚めなかった。実はあの直後、俺はオゴポゴに噛まれていたらしい。そして、死にかけていた俺の命を救うのは長門でも越権行為だったと朝倉から聞いたが、その説明はほとんど頭に入らなかった。

眠り続ける長門と、それを看病し続ける俺を見て、ハルヒやその他のメンバーも色々と察したらしい。俺はそれからずっと長門の世話を続けたが、誰も何も言わなかった。日本に帰り、学校が始まってからも俺は長門のところに通い続けた。

そして、卒業間近になったある日、長門は突然に目を覚ました。

「宿題はもう終わった？」

さすがに長く寝過ぎて寝ぼけていたのか、長門は最初にそう言った。泣きながら抱きしめる俺に、長門は「能力が無くなっている」と言った。

そんなわけで、俺は高校を卒業すると同時に長門と入籍。一生養うと心に決めてから、もう六年も経った。

大学に行っている間は長門を居候させて実家で暮らしていたが、今は二人で暮らしている。サラリーマンとして働く毎日はあの頃に比べると少々退屈ではあるが、長門の為だと思えば辛くはない。

慌ただしく平凡な日々に比べると、あの頃は毎日が驚きの連続だった。ハルヒに振り回されていたのも今となっては良い思い出だ。

「後悔してる？」

考えている事がわかったらしく、長門が少し不安そうにじっと見つめていた。

「いや、俺は満足してるぞ」

長門の体を抱き寄せる。そのお腹の中には、新しい命も宿っており、俺が守らねばならない。

「子供が生まれたらあいつ等に会いに行くか」

「わたしもそうしたい」

長門を抱きしめながら、テーブルの上に置かれた写真立てを見る。

その写真の中には、生け捕りにしたオゴポゴの前で満面の笑みを浮かべるハルヒと、ＳＯＳ団員の姿が映っていた。俺と長門は抜けてしまったが、今も残りのメンバーはＵＭＡを探して世界中を飛び回っており、テレビ番組も持つほどの有名人になった。

あの中にいたら俺も波瀾万丈の生活が……と思わない事もないが、今の俺にとっては長門と俺達の子供と一緒に暮らすというささやかな夢の方が大事なのさ。

あとがき

このたびは、魔界都市出版オフセット本第四弾、『涼宮ハルヒの探検隊』を最後まで読んで頂きありがとうございます。

今回の本は昨年の初冬から半月ほどにわたって連載した一連のオゴポゴ探索シリーズをまとめたものです。途中にブランクがあって半月以上の長期に渡って連載……正直、自分でも予想外だったりします。仮面ライダーナガトの時は五回で終わったのですが、まあその時とは違って裏で同人作業をしていたとかそんなのもあったり無かったり。

ちなみに今回のシリーズは夢オチと長門が作中で述べていたため、WEB上のブログで連載をしていた時はあらすじと称して「夢」と言う単語が入る文章を色々引用しておりました。歌の歌詞とかシャブさん（某歌手）と一時期争っていた某漫画家の人の有名な言葉なんかも引用しておりまして、このまま掲載すると某漫画家もしくはシャブさん（某歌手）あたりからコラッされるんじゃないかなと思ってその部分は掲載を見合わせました。興味のある方はブログの方をご覧下さい。

さて、今回はちょっと没ネタなんかを書こうと思います。本当は「テコ入れ」の時に妹も登場させようと思っていたのですが、それが出来なかったのですよね。そんなわけで、没になった妹ネタ公開。

10.5

本日の探索が終わり、やれやれと俺は部屋に戻る。今日こそオゴポゴを発見して終わらせてやろうと意気込んだのだが、やはりそう簡単にはいかないらしい。人数が増えたのは、戦力になると信じたいが、喜緑さんは下手をすると足を引っ張りかねないというのが問題である。

まあ、考えていてもどうしようもない。飯食って風呂に入って、寝るか長門といちゃいちゃするだけだが……待てよ、人数が増えたが、今夜の寝室はどうなるんだ？　もしかすると、長門と過ごしづらくなったのではなかろうか。

こうなると、一刻も早くこの生活を終わらせねばならない。明日の探索こそは成果を出してやる。

「そう簡単にはいかないけどな」

ふうとため息をついてベッドに横になる。飯まではもう少し時間があり、こうして横になっていても大丈夫だろう。

ガサ――

何か、物音が聞こえたような気がした。古泉はいない。今、この部屋にいるのは俺だけのはずだというのに。

いや、そんな変なものが現れるはずがない。俺が見付けたいのはあくまでもオゴポゴだけであり、心霊現象などはまっぴらだ。

ガサ――

まっぴらだというのに。

待てよ、ここまではっきりと音が聞こえるという事は、心霊現象ではなく何か実態を伴ったものであると考えた方が正しいのではないだろうか。俺の部屋に侵入する者と言えば……長門か？

ふふ、長門にも困ったものだな、会いたいのなら正面から堂々と来たらいいのに。そうか、隠れんぼだな。見付ける事が出来たら楽しい一時が待っており、見付けることが出来なければ長門にとって楽しい一時が待っている。つまり、どちらにしても同じわけであるが、一緒にいる時間は長い方がいい。つまり即発見して一緒に遊ぼう。この場合の遊ぶってのがどのような意味かはここでは述べない。

さて、先程からガサガサと聞こえる物音の出所はどこだろうか。下の方から聞こえたような気がするのだが……

「ここか？」

ベッドの下を見たが、長門の姿は見つからない。代わりに斧を持った男が息を潜めていた。

いや、嘘だ。そんな奴もいない。

ベッドの下以外に隠れられそうなところは、この絨毯の下……いや、いくら長門でも、そんなトリッキーな隠れ方はしないだろう。

となると、

ガサ――

今、何か視界の隅で動いたぞ。何か視界の片隅で

見えているものが、確かにほんの少しだけ蠢いた。
俺はゆっくりと首を回し、
「ほう」
その正体を発見した。確かに、これが動いていたはずだ。
それが何かと言うと、俺の持ってきたカバンに他ならない。確かに長門ならこの中に隠れる事が出来ても不思議じゃない。
「あれ？　気のせいかな？」
俺はわざと気付いていないように言って、足音を忍ばせてそれに近付いていく。
よく見ると、俺のカバンは明らかに膨らんでいた。何か詰め込みすぎたようにパンパンになっている。
「見付けたぞ！」
近付いた俺は、一気にカバンのジッパーを開け、
「えへっ」
妹と目が合った。
「もう、遅いよキョンくん。ずっと隠れてたのに」
妹はぷんすかと笑いながら怒り、カバンの中からにゅっと出てくる。
ええと……妹よ、一体いつからここに入っていたんだ？
「ずっとだよ」
家を出てから俺は何日ここにいるんだ？　その間、ずっとこの中に隠れていたって事か？
そもそも、俺は今までカバンを使っていなかったか？　だって、着替えだって洗面道具だって、成人向けの玩具だって使っていたはずだぞ。あれ、どういうことだ。
「あまり気にしなくていい」
長門がぽんと俺の方を叩く。
長門、お前もいつの間にここに来ていたんだ？
「夢オチだから気にしなくていい」
そんな疑問を全て吹っ飛ばす魔法の言葉。そうだよな、それじゃあ仕方ない。
で、妹はどうしてここにいるんだ？
「テコ入れだから」
そうか。
「キョンくん、テコ入れって何？」
さあな、俺はよくわからん。長門から説明してやってくれ。
「テコを挿入するプレイの事」
違う。

と言うわけで、実はこんな感じのボツネタも考えておりました。さすがに日数が長くなりすぎるかなとカットしたわけですが、このエピソードを入れなかったので全員集合とはならなかったのですね。まあ、谷口国木田は最初から数に入れてませんが。
ちなみに、没ネタはもう一個ありますので、そちらも公開してみます。

8.5

何かがこの建物にいる、と気付いたのはいつ頃だろう。誰も口には出していないが、全員がその存在には気が付いているようだ。
口に出さない理由は、それを言葉にしてしまうと実体化してしまいそうな気がしたからだ。名前を与えてしまうと、それの存在を許してしまうような、そんな奇妙な感覚。
「涼宮さんが原因かも知れませんね」
ある日、古泉が深刻な顔をして切り出した。
「もしかしたら、涼宮さんがそのような存在を連想するような、そんなきっかけがあったのかも知れません。おあつらえ向きの館ですし」
そんなものを連想したエピソードというと……まさか、あのデュラハンの一件じゃなかろうか。アイルランド生まれの首無し騎士。俺がその名前を出してしまったせいで、ハルヒは思ってしまったのかも知れない。
ここには、それがいる、と。
「幽霊、ですね」
古泉、お前、不用意に名前を与えてしまったな。そんな事をしてしまうと、
ドンドン！
「ねえキョン！　あたしもずっとおかしいと思ってたんだけど、ここのメイドの中で夜中に人影を見たって人がいるのよ！」

ほらな。
「入るわよ。やっぱりそれ、幽霊なのかしら」
俺達の了承も得ずに入ってきたハルヒが腕を組んで考え込む。着替えてなかったから良いものの、もし裸だったらどうしたんだろうかね。
「気のせいだろ。簡単にそんな不思議なものがぽこぽこ出てきても困る」
オゴポゴはそろそろ出てくれないと困るのだが、他のものが出てきてしまっても厄介なだけだ。
「キョン、今晩ちょっと見てきてくれない？　目撃情報がある場所は大体決まってるから」
そんなめんどくさい事はやりたくないんだが。
「……」
ハルヒは頬をふくらませて俺をにらみ付ける。そんな顔をしても行かないぞ。行かないんだからな！
と、押し切る事が出来るなら俺は最初からSOS団には入っていないだろうし、その点じゃ長門と出会わせてくれたハルヒに感謝しなきゃならん。
ともかく、俺はハルヒに渡された女物の黒い服を着て真っ暗な廊下に潜んでいた。
ハルヒ曰く「幽霊ももしかしたら視界で物を見ているかも知れないじゃない。効果はないかも知れないけど、やらないよりはましでしょ？」だそうだ。
しかし、何も出ないとは思うんだけどな。
ぺた――
気のせいだよな。
ぺた、ぺた――
何かの足音のようなものが聞こえる。いや、それは「ようなもの」ではなく、足音そのものだろう。
何か、見える。
ある程度はこの暗闇に目が慣れているのだが、それでも輪郭くらいしか見えない。
なにか、とても小さいものが見える。ぺたぺたと、足音を鳴らして――
ふと、俺は中学の頃に聞いた階段を思いだした。
委員会が遅くなって真っ暗な校舎をみんなで歩いていた時に、一人が忘れ物を思い出して戻って行くと、何か物音が聞こえたような気がした。
それは、何かの音色。音楽室の防音扉越しに、下手くそな猫踏んじゃったが聞こえて来て、ドアを開けるとそこには――何もいなかった。
いや、今回の件とは無関係だけどな。
それはさておき、ぺたぺたという足音は近付いてくる。小さな人影は、明らかに大人ではない。
この建物に、子供はいない。最年少が俺達高校生軍団であり、それ以外は古泉のお仲間だけだ。となると、ここにいるのはやはり――
いや、待てよ。近付いてきたそいつは、明らかに、何の変哲もない、子供、と言うか――
「おい、なんでここにいるんだ」
「あ、キョンくん」
その小さな子供は俺の妹の声で答えた。ここのところしばらく会っていないが間違えるはずはない。
「キョンくんが遅い様子を見にから来ちゃったけど、この建物が広くて迷っちゃって」
そして、誰にも会えずに徘徊していたと――なんだそりゃ。昼間に誰かに言えば良かっただろう。
「昼は眠かったから寝てたの」
お前は動物かい。全く、人騒がせな。
「時差の関係で皆が寝ている時間に活動していた」
と、いつの間にいたんだ長門。まあ、解説ありがとよ。こっちの昼間は日本の夜って事だよな。
「そう」
で、なんで妹がここにいるんだ？　聞く必要はない気がするけどな。
「テコ入れだから」
そうか。
「ところでキョンくんはどうしてゴスロリなの？」
聞かないでくれ。

それでは、今回は没ネタを書いていたらページが無くなってしまったのでここらで締めさせて頂きます。やたらと長いこの後書きを読んでくださった方々に心から感謝します。
平成十九年二月某日
「仮面ライダー電王」を見ながら

今日の長門有希外伝

涼宮ハルヒの探検隊

【魔界都市出版】

〈初出〉

プロローグ……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月十六日
1……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月十七日
2……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月十八日
3……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月十九日
4……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十日
5……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十一日
6……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十三日
7……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十四日
8……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十七日
9……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十八日
10……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月二十九日
11……「魔界都市日記」二〇〇六年十一月三十日
12……「魔界都市日記」二〇〇六年十二月一日
13……「魔界都市日記」二〇〇六年十二月二日
14／エピローグ……「魔界都市日記」二〇〇六年十二月三日

平成十九年二月十一日　初版発行

発行者——maepy(魔界都市日記)
maepy@home.email.ne.jp
maepy14age@hotmail.com
http://d.hatena.ne.jp/maepy/(魔界都市日記)

口絵・本文イラスト——らーめん(ねこうさプリン)

印刷所——有限会社ねこのしっぽ

本書の無断複写・複製・転送を禁じます。

【魔界都市出版】